

楽しい沖縄料理 (4) ごぼう巻

にんじん食堂うずまさ 料理人・じつかた ふじお



【作り方】

(1) ごぼうの表面をごく薄く、こするようにして、こそげます。



(2) 適当な長さに切り、ゆでてから、ごぼうの皮と芯の間に細い竹串などを刺し込んで、ぐるりと回します(写真・上の列左)。反対側からも同じことをします。皮が割れないようにやさしく扱きましょう。

(3) ごぼうの軸をスポッと取り除きます(写真・上の列中と右)。(4) 軸が抜けました(写真・下の列左)。別のごぼうの皮だけをタテに分割して(写真・下の列中)、軸を取り除いた空間に詰めます。

(5) 抜け落ちない大きさ・形のものを詰めれば、皮だけのごぼうのできあがりです(写真・下の列右)。

(6) ごぼうを豚肉で包みます。肉の売り場で薄切りの肉が見つからないときは、肉屋さんで薄く切ってもらいます。豚肉を広げて、ごぼうを手前に横に置き、くるくると巻きます。ただ巻くだけでもいいのですが、最後に両端を曲げて、葉巻のように形を整えると立派な感じが出ます。



編集後記

冒頭ページに紹介しましたとおり、去年から支援している福島県伊達市の本田貴之さんが、3月11日に京都に来て下さいました。高線量の環境での息が詰まるような暮らしについて話して下さいました。本田さんは、福島にもどって、子ども音楽祭を企画しました。外遊びが思うようにできず、窮屈な思いをしている子どもたちに、楽しい思いをしてもらいたいとの願いからです。

その後、主催は伊達市内の3つの自治会になり、7月29日(日)の開催に決まって、準備は着々とすすんでいます。

本田さんから全国の皆さんへのお願いです。「伊達子ども音楽祭」のステージで子どもたちが着るおそろいのTシャツをプレゼントしてほしいとのこと。

楽天堂でTシャツ制作費のカンパを集めています。振込先は、下記です。どうぞよろしく願います。(千晶)

【振込口座】 口座名義「楽天堂」

- ① ゆうちょ銀行 記号：15560 番号：2463561
店名：五五八店 口座番号：0246356
- ② ジャパンネット銀行 本店営業部 普通：4533169

ゆでたごぼう(牛蒡)を生豚肉で巻き、煮込んだ料理が「ごぼう巻」です。

「豚肉のごぼう巻」とも言われます。しかし、よく考えてみると、ごぼうを豚肉で巻いてあるので豚肉の「ごぼう巻」より、ごぼうの「豚肉巻」のほうが正確に思えるのですが、やっぱり豚肉の「ごぼう巻」が正解。なぜかという、この料理、豚肉とごぼうという相撲でいえば東西の横綱が、がっぷりと組み合ったような料理に見えますが、実は豚肉料理ではなく、あくまでもごぼう料理に分類されているので、名前もごぼうが主役で「ごぼう巻」と言うわけです。沖縄では行事のごちそうなどにも欠かせない高級料理なのです。

沖縄の場合、豚肉はまず丸ごとゆでてから切り分けて調理するのが原則ですが、このごぼう巻は例外で生の豚肉を使います。生肉を使うことで、加熱されていく過程で豚肉がゴボウをしっかり包むからです。今回、豚肉はロースの薄切りを使用しました。ロースはAロース、ポーシとも言います。ある程度の大きさがあってスジと脂肪があまり多くなければ、どんな豚肉でもかまいません。沖縄で言うBロース、すなわち肩ロースでつくると、コクが出ます。

問題は主役のごぼうです。ごぼうは外側の皮と、中心の軸に分けられます。軸の部分には導管というものがあって、毛細管現象により水分を通します。だから、ごぼうの鮮度も保たれます。軸はこのように大切な役割を担っているのですが、毛細管現象を起こしやすくするために、構造的にはスジっぽくなっています。タテ半分に割ってみると、見た目にも軸はスカスカしています。試しに軸だけ食べてみると、ひどくまずい・・・のです。

黒くて一見汚く見える、ごぼうの皮には色素が多く、味が濃くておいしいのです。また、組織がしっかりしていて歯応えがすばらしく、よい香りもあります。そこで中心の軸のところは思い切って取り除き、皮だけを使ってみましょう。すると、これまで味わったことのない「ごぼう巻」に遭遇できるはずですよ。

※日本料理でも、ごぼうの芯を抜いた料理はあります。京都の堀川ごぼうなども、くり抜いた穴に肉などを詰めることが多いようです。でも、ごぼうの皮の中にごぼうの皮を詰めるという料理法はたぶんないと思います。

※にんじん食堂太素 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~ninjin-s/>



らくてん通信

No 56 2012/04/20 発行 楽天堂
季刊 編集長・高島千晶

〒602-8354 京都市上京区下立売通七本松西入西東町364-14 TEL:(075)811-4890 FAX:020-4665-6740
exchange@rakutendo.com ツイッター <http://twitter.com/chiakitakashima>
営業日時：月-土曜(日曜&祝日休業) 午後1-7時

豆ランチパーティー報告・冬～春

福島県伊達市在住

本田貴之さんをお招きして(3/11)

キッチンハーリーナ・佐藤 友子(とゆう ゆうこ)

豆ランチパーティーに参加させていただき感謝です。メーリングリストの情報を読むだけでの会員ですが思い切って参加して本当によかったです！

「散歩ができて本当にうれしかった。京都に来た甲斐があった」というのつけからの本田さんの言葉にはとまりました。散歩ができないんだ。窓も全開できない、家の敷地にたくさんの高濃度の枯れ草が山積みになっている。ああそうなんだ、そんな中で子供たち大人たちが暮らしているんだ。除染をはじめやらなければいけないことがたくさんあるとおっしゃっていました。独りでできること、独りだけではできないこと、なかなか答えが見えない中で日々の生活を意思を持って丁寧に暮らしておられるのです。

娘さんたちと週末疎開を決めてから、ずっと支えてくれたお母様やお兄さんとも微妙な距離ができてしまっているそうです。私は東北の生まれなので、都市とは違う農村の共同体意識、空気感などなくわかる感じがあるような。

少し脱線しますが、今、3月6日に出版されたばかりの岩波ブックレット『内部被爆』(矢ヶ崎克馬・守田俊也共著)をよんでいて、矢ヶ崎さんが昨年3月下旬に福島を訪ねたときの思いを語ってくだりがあります。矢ヶ崎さんは内部被爆研究の第一人者として、とにかく放射線の被害から身を守るために避難を呼びかけるつもりで、福島に馳せ参じたのですが、現地でたくさんの人と出会い、対話の中で強烈な郷土愛に感銘を受けます。沖縄の人々と同じ目の色を感じたそうです。そしてこう変更したと。

「福島を守る作業として、自分たちが総合的にどんなことをしていくのか、汚染された土地をどのように再生していくのかということかかわりも含めて考えていくべきで、単純に被爆ゼロがいいというだけではいかんと思ったのです。あの時にたくさんの人たちにお会いしていなかったら、私の主張はかなり一面的なものになっていたと思います」

「やはり大事なのはそこにいる人の、未来に向けた思いや意思です。」

私も本田さんに直接お会いし、お話しをお聞きし、もっともっと本田さんから、そこに暮らす方々から、学びたいと思いました。そして、実際に福島に行きこの目で確かめ空気を吸ってみようと思いました。本当に、いろんなことにはとさせられたのです。

本田さんは終わりがけに「どうか福島のことを忘れないでください」と言われました。忘れないってどういうことだろう？忘れないでい続けるには、私がどう在ればよいのだろうか？いろいろ悩みは尽きませんが、早急に答えが出なくてもよいしゆっくり反芻しながら歩いていきたいです。

美味しい食卓を囲みながら、「滋養ってこんなご飯のことをいうんだなあ」と感動しました。みなさん、本当にありがとうございました。

立藤 慶子

(たてふじ けいこ)



私は、なぜか今は、京都で神社仏閣を中心としたライターをしています。学生時代は途上国といわれる国々に関心があり、カルカッタのマザーハウスでボランティアをちょこっとしたり、ビルマ難民キャンプのNPOの支援についていたり、大学院時代も、支援のあり方を研究している専門大学院におりました。ですから6年くらいは支援のあり方について考えていたわけですよ。そのような学生時代を通して、私が臍に落ちた支援のあり方は「共に有る」というスタンスでした。

途上国支援(という言葉は嫌いです)と原発震災をどこまで同じ枠組みで考えられるかわかりませんが、共に有るというスタンスに立てば、現実的に福島にとどまることを決めた人たちが多くなかで、単純に避難を推奨したり、がれき受け入れに反対したりはできない、というのが、ずーっと考えていたことでした。とはいえず、周りに「避難すべきだ」とか「がれき受け入れ反対」の声が多いので、なかなか発言できずにおりましたし、何しろ私がほとんどこのたびの原発震災や津波の被災に何もしていないので、発言する気がひけていました。

まあ、そういう気持ちから、とにかく本田さんのお話をじっくり聴きたくて、ハーリーナの佐藤さんにおっしゃったように「できるだけ自分をまっさらにして本田さんの話を聴こう」と思って参加させていただきました。

それができたかどうかはわかりませんが、本田さんが「話ができてよかった」とおっしゃったのが、印象的でした。できることなら、もっとまっさらにして、じっくり聴きたかったなあ、という気分です。私は、現在の仕事でいろいろな人にインタビューをさせてもらっていたり、その他たくさんの経験から、支援のあり方としての「聴く」ということに、けっこう関心を持っているので、「話しができたのがよかった」という本田さんの言葉に、「聴く」ことの可能性をよけいに感じました。

最後に、余談ですが、本田さんが撮られたという仁和寺の前で僧侶が横断幕を掲げている写真、すてきですね。

私は、ふだんから京都の僧侶や神職の方々とおつきあいがありますので、震災後、京都の各社寺が東北の人々の祈願・祈禱をされている話をよく聞きます。東寺の御影堂奥には、信者のご位牌などをずら————り(すごい数なんです)並べた場所がありますが、中央高段の仏様のそば、皇室のご位牌と同じ位置に(こう書くと、皇室批判の方のご批判を浴びそうですが、それはおいておいて)東日本大震災で亡くなられた方々を供養する位牌が安置されているのを見せてもらったときはびっくりしました。毎朝お経をあげておられるそうですよ。(ちなみにそのすぐそばに、大変な被害を出した明治の三陸地震のときの位牌も安置されていました)京都って、こういうところなんだよね、と思います。

岡田 喜美子 (おかだ きみこ)

来てくれてお話をしてくれた本田さん、企画してくれた千晶さん、細かな心配りをしてくださった木田さん、他の参加者のみなさん、ありがとうございました。

このMLのみなさんはしっかりと伝える言葉をもっていらっしゃるかたばかりで、私はなんともボキャブラリーの少ない人間だと恥ずかしくなるのですが、勇気をだして(笑)、投稿します。

というのもあの場の空気感を伝えるのは難しい。本田さんがしきりと現地に来てほしい、自分で感じてほしいと言っていました。やはりその場に自分が行って、体験しないと得られないものは多いと思います。ですが、本田さんはしっかりとたくさんのことを伝えてくれました。あの場所で生きていくと決めた人たちの愛、やさしさと強さを感じます。

強制的に国が子どもたちを移動させるべきだと思いますが、今はそれができていない。あの場所で生きている子どもたちがまだいる今はそれを支えていく大人が必要ですね。

その場に残ると決めた本田さんのようなひとたち。そして周りにいる私たち。保養でも疎開でも避難でもなく、いつでも遊びに行ける楽しい場所を作る。受け入れることによって、私たちも救われます。現地に行って何かしたいけど、できない私たちはその場にいる人とつながることで救われます。その第一歩が本田さんとの今回のつながりだと思っています。

日々、自分には何ができるかと問いながら生活してきましたが、私は月2回自宅で集まりをはじめています。もちりランチでわいわいおしゃべりする場です。母子で避難してきている人たちも遊びにきます。京都で何不自由なく、暮らしている私たちはそのお母さんたちの声を受け止めることしかできませんが、そこから多くの気づきを得ることができます。

本田さんが普通に散歩できるのがうれしい。と何度もおっしゃっていました。無駄に子どもたちを怒っていることがある自分。普通に生活できるだけで幸せなのに他に何を望むのだ。

最近いとこの子どもがなくなりました。もともと心臓がわるかったのですが、急に。1歳になったばかりの子です。うちの愛ちゃんと同じ。本当にかわいいざかりです。期間限定だとわかっていながら産

まれてきてくれたその子は私も含む周りの大人にたくさん大切なメッセージを持ってきてくれました。生きるって何だろう。豊かさって何だろう。自分には何ができるか。何をしたいか。生きている間に何ができるのか、自分の使命は何なのか。同じ地球に住むもの同士、争いではなく、愛でつながり、手を取り合って歩んで行きたい。子どもとともに幸せな世界を広げたい。

つながりは力になります。本田さんと繋がることができたこと感謝します。帰り道こどもたちが本田さんが持ってきてくれた胡桃味噌のこと、あれおいしかったな〜と話してました。ごちそうさまでした。

あと、木田さんが終わりの感想のとき、「東電にはこれからがらんばってもらわないといけない。」とはなしていた言葉が衝撃でした。私は東電、国が責任を取るべき、賠償させるべき。という考えしかありませんでした。東電(すべての大人もかな)は今までのことを反省し、前を向いて動き出さないとけない。そのためには東電にさえも愛を送らないといけないのか。人は愛でしか動かないから。東電にもだめだめだと思われる政府にも愛を送ることができる人になりたいと思いました。

本田さんより



昨日、豆ランチパーティーに参加させて頂き思った事を素直に述べたいと思います。

今、東北福島県で起きている事を言葉で表現して、その場の状況を伝える事は難しいと思いました。他県で

は確かにピンとこないかもしれませんが。でもそれは仕方ないと思いました。だってそこには、放射能ないし、瓦礫もないし普通な生活出来るのだから。昨日豆ランチパーティーで話を聞いて下さり、涙を流して下さった方、ずっと話を聞いて下さった方、色んな意見があり僕個人的には有意義な1日でした。

一番に、散歩が出来た喜び、普通に歩ける事って本当に素晴らしいと思いました。少し足が痛いけど。でも、その傷みはやっぱり大事な傷み。千晶さん、木田さん。本当にありがとうございました。また、僕は2重生活※に戻りますが。

あの『おやし』で食べたお握り、おでん、焼き鳥、玉子焼き美味しかった。久々に、思いっきり笑ったなあ。移住したい気持ちにもなるけど、やっぱり僕は伊達市の子ども達大好き。この子どもには明日あります。元の田舎の伊達市に戻るの、大人が責任もってやらないと！京都の滞在時間はハードでしたが夢のような1日でした。京都の方言で、『ほんまに、おおきに！』またいつかお逢いしましょうね。

※編者注)本田さんのご家族は山形に週末避難されています。

の持ち込みに反対しなかったのか、できなかったのか。それは“唯一の被爆国”という建前の下で、本音としてはアメリカの「核抑止力」に通じるイデオロギーを共有していたからである。

※

日本では、原発は「国策民営」と言われている。なぜ「国策」なのか。加藤氏は次のように論究する。核燃料サイクルの確立(原子力発電所の使用済み核燃料を再処理してプルトニウムを抽出し、高速増殖炉で再び燃料として使用するもの。日本の現状では高速増殖炉もんじゅの実用化が白紙のため、ウランと混ぜて既存の軽水炉型原発で燃料として用いるプルサーマル発電が試験段階に入ったが、作年のフクシマ事故により各地で中断を余儀なくされている)を建前(＝隠れ蓑)としつつ、本音はプルトニウムを保有することで「核兵器は持たないが、核兵器を製造する技術的、潜在的能力は保持することに、一つの抑止力を認める(中略)現在の世界の軍事バランスのうえに立つ戦略的なあり方」を権力層が志向してきたからではないか、と。

1955年に制定された原子力基本法には「核燃料サイクルを確立」という文言が盛られているが、その秘められたネライは岸信介(当時の自民党幹事長、後の首相)『回顧録』の次のような述懐から窺える。

「昭和三十三年[1958年]正月六日、私は茨城県東海村の原子力研究所を視察した。日本の原子力研究はまだ緒についたばかりであったが、私は原子力の将来に非常な関心と期待を寄せていた。

原子力技術はそれ自体平和利用も兵器としての使用も共に可能である。どちらに用いるかは政策であり国家意志の問題である。日本は国家・国民の意志として原子力を兵器として利用しないことを決めているので、平和利用一本槍であるが、平和利用にせよその技術が進歩するにつれて、兵器としての可能性は自動的に高まってくる。日本は核兵器を持たないが、[核兵器保有の]潜在的可能性を高めることによって、軍縮や核実験禁止問題などについて、国際の場における発言力を高めることが出来る」(山本義隆『福島原発事故をめぐって』みすず書房より引用、[]内は著者補足)。

国家主義者の面目躍如の文章である。被爆者の祈念を真に尊び、「軍縮や核実験禁止問題」に積極的に関与しようとするならば、自ら核兵器保有の潜在的可能性を低めることこそ他国への範を示す筋道であろうが、「国威発揚が第一」という“始めに結論ありき”のため、論理が倒錯した詭弁になっている。しかしそれ以上に問題なのは、このよう国策のイデオロギーたる核の「技術抑止力」論が、国民に知らされることなく(かつて一度も国会で議論されたことがない)、政府自民党(＋民主党)・官僚・マスメディアの権力層によって密かに保持されてきた点にある。例えば、1969年に外務省が密かに作成した『わが国の外交政策大綱』という「極秘・無期限」の文書には、次のように書かれている。

「核兵器については、NPT(注 核拡散防止条約のこと)に参加すると否にかかわらず、当面核兵器は保有しない政策をとるが、核兵器製造の経済的・技術的ポテンシャルは常に保持するとともにこれに対する掣肘をうけないよう配慮する」

※筆者ホームページ <http://www.takayanagim3.com>

加藤氏はこのような状況を戦前と比較して危惧する。

「それは戦前の「国体」と似ている。なぜなら、国の基本をなす基軸であるのに、一度も国民の信を問われておらず、また国会でも討議にふされないまま、別の場所で決定されているからだ。

またそれは、戦前の「天皇制」と似ている。鶴見俊輔と久野収が、かつて天皇制の顕教密教制というものを唱えたことがある(『現代日本の思想——その五つの渦』)。戦前の社会では、天皇は、まず初等教育機関で、タテマエとして、神だと教えられ、その後、高等教育機関で、ウチワの真実として、国家の一機関であると教えられた。前者は顕教、後者は密教であり、この二つの使い分けで天皇制が機能していた、とする考えである。これに似て、「原爆を経験した」日本の悲願のかたちとして唱道された「原子力の平和利用」は、タテマエにすぎず、その実、高等教育機関を出た官僚のあいだでは、その同じものが、「技術抑止」の手段と理解されている。そしてそのことは、国民に知らされてはならない。あるいは、人は、そのカラクリを知ることで、国の密教世界の列に加わる」

私たちには責任がある。フクシマにもオキナワにも、そしてビキニやヒロシマ・ナガサキにも。

「原発は民主主義の問題である」——昨年亡くなった加藤哲夫(元せんだい・みやぎNPOセンター代表理事)の至言である。

※

今年の3月11日、京都で第1回のマラソン大会が開催された。その時、コース沿いの仁和寺門前で、僧侶たちが「東北 共に在り」という幕を掲げて応援した。フクシマから1年——しかし沖縄では半世紀以上も、アメリカ軍基地に存在する(と誰もが疑念を抱く)核兵器(アメリカは軍事上の観点から核の存在を否定も肯定もしない「あいまい戦略」をとり、日本政府はアメリカからの事前通告がない限り日本には持ち込まれていないと信じるという没主体的・欺瞞的な態度をとり続けてきた)に脅かされてきた。

〈基地があるから核がある〉〈原発があるから核になる〉——それならば、私たちが沖縄から本土からアメリカ軍基地(の象徴的存在が、「世界一危険な軍事基地」とアメリカ軍関係者ですら認める普天間飛行場だろう)を無くすことができれば、と同時に核の「技術抑止力」論に基づく核燃料サイクルを放棄して原発を廃炉にすることができたなら、その時初めて、被爆者の祈念から生まれた国是の非核三原則は真の意義を取り戻し、私たち自身もまた建前と本音の乖離を克服することができるだろう。どんなに困難な道であっても、世界に先駆けて核廃絶への道筋をつけるこそ“唯一の被爆国”日本に生きる公民としての私たちの使命ではないだろうか。

そのことを心中に期しつつ、私は「沖縄 ともにあり」の小幡を掲げようと思う。

お知らせ

〈からだことばを育む会〉体験会 5/12(土) 時間:13-17時
会場:乾窓禅院 会費:一般4500円・豆料理クラブ会員3000円
※身体感覚の入門編です。「腰が入る／抜ける」という感覚を体験し、「脊椎行気」(せきついきょうき=背骨に気を通す事)を行います。老若男女を問わず初心者歓迎!詳しくはHPをご覧ください。

書評

『3・11 死に神に突き飛ばされる』(加藤典洋著・岩波書店)

高柳 無々々 (たかやなぎ むむむ)

一見、相対立しているようで本質的にはお互いにもたれかかり両者共に直面している課題の解決に向けて真に力を尽くしているとは言えない——例えば、憲法第九条や戦死者への祈念をめぐって対立してきた戦後の「革新」と「保守」の双方に欠落した視点から問題点を剔抉(てつけつ)し、歴史責任を負う主体としての日本人がどのように向き合うべきかを論じた『敗戦後論』の著者・加藤典洋氏が、フクシマを受けて昨年秋に評論集『3・11 死に神に突き飛ばされる』(岩波書店)を出版した。

この論考の中で加藤氏が「コインの裏表のような存在」としてとりあげているのが、手塚治虫原作の漫画『鉄腕アトム』と円谷英二が特撮監督を努めた映画『ゴジラ』という二つの文化象徴である。『アトム』は1951年に連載開始、1968年まで少年雑誌に掲載されたのと前後してテレビでも何度かアニメになって放映されている。一方『ゴジラ』は1954年に制作され、空前のヒットとなったため2004年まで計28本が続編として作られ延べ9920万人が観ている。アトムとは原子力で動く少年ロボットで、「心やさしい ラララ 科学の子♪」とアニメでも歌われた正義の味方である。それに対してゴジラは、ビキニ環礁の海底に眠っていた怪獣がアメリカの水爆実験によって眠りを覚まされ、怒りから日本を襲うという設定であった(1954年の「第五福竜丸事件」が背景にある)。この一見相反するモノに対して、氏は次のように述べる。

「この二つは、ともに「原子力＝核」を想像力の母胎としているという共通点を持つ。ここに「原子力」と「核」と、二つの術語を並べるのは、この二つが、英語ではともにnuclearという一語に該当しているからである。このことを私は、先出の小出裕章の著書『隠される原子力・核の真実』で教えられた。この同じ語が、日本では、平和利用の際には、nuclear power plant＝原子力発電所と呼ばれ、軍事使用の場合には、nuclear weapon＝核兵器と呼ばれる。一方は、肯定的なイメージ、他方は、おどろおどろしい悪のイメージ。ほとんど無意識のうちに、私たちのもとで二つに「使い分け」られてきたが、英語では、ともにnuclear。原子力と核の根は、いわば表象のうえでも、同じなのであった。

だとすれば、文化象徴としての「アトム」と「ゴジラ」にもまた、つながりがあるだろう。あってしかるべきだろう。そうでなければならぬ。

しかし、私は、今回の事故が起こり、それを人に指摘されるまで、ついぞこの二つの文化アイコンが、いわば一つのもの、原子力エネルギー＝核エネルギーを母胎としたコインの裏表のような存在であることに、思いあたらなかった。(中略)

なぜなのか。

私だけではない。この国には、管見に入った限りで、両者とともに登場するメディア・ミックス的な想像力の産物が、パロディとしても、これまで一度として作られていないらしいのである。(中略)ゴジラの破壊をとめようと、アトムがやってきて、ゴジラに説得を試みる、そんなパロディは、どこにもない。

なぜなのだろうか」

加藤氏の自問自答は続く。

「なぜ私たちは、二度も原爆を投下されたのに、原発の平和利用に希望を見る、というような「過ち」を犯すことになったのか。

しかしそれは、二度も原爆を投下されたのに、ではないのではないだろうか。そうではなく、私たちは、「原爆を経験した」から、「原子力エネルギーの平和利用」に夢を託すようになったのではなかっただろうか」

※

加藤氏の考察は次のように展開する。二度とこのような過ちを繰り返してはいけないという被爆者の“祈念”が、一つはアメリカの「アトムズ・フォー・ピース」(核の平和利用)戦略に、他の一つは日本の国家主義者たち(政府自民党・官僚・マスメディア)の核の「技術抑止力」論に利用されてしまったのではないかと。

被爆者の祈念がどのようなものであったかは、1956年の日本被団協(日本原水爆被害者団体協議会)の結成大会宣言文に見てとれる。

「私たちは今日ここに声を合わせてたからかに全世界に訴えます。人類は私たちの犠牲と苦難をまたとふたび繰り返してはなりません。破壊と死滅の方向に行くおそれのある原子力を決定的に人類の幸福と繁栄の方向に向わせるということこそが、私たちの生きる限りの唯一の願いであります」

加藤氏はここにアメリカのプロパガンダによるマインドコントロールの影響をみつつ、しかし彼ら(被爆者)には原子力の平和利用を祈念する“権利”があると指摘する。なぜならば、

「(原爆は)「人道に対する罪」とは呼ばれつつも、その罪科のもとにこれをもたらした者を処罰するにはいたらない。戦闘員・非戦闘員、大人・子どもひとしなみの無差別の大量虐殺である以上、国際法違反であることは明白だが、日本の国も、国連も、国際司法裁判所も、これに抗議の声をあげ、これを取り上げ、違反国を指弾また、処罰する気配もない。そのすじみちはどこにもみえない。

原爆を投下した米国は、いまなお、そのことで、法的な指弾を受けていない。また、自ら謝罪もしていない」

私たちに責任がある、と加藤氏は言う。被爆者をそこまで追い込んでしまったことに対して、また「どうすれば、原爆で死んだ——殺害された——無辜の人々の無念が、霽(は)らせるのか、そのことを、社会全体に向け、また、世界全体に向け、深く考えてみること」の責任が。

私たちの責任は、さらに二重性を帯びてくる。というのは、非核三原則(核兵器を持たず、作らず、持ち込ませない)を「国是」(1968年、佐藤栄作首相の国会答弁を歴代政府が継承)としていた日本国家が、1969年の沖縄返還交渉の時に有事の際の沖縄への核兵器持ち込みを認める密約文書を佐藤・クソン(アメリカ大統領)会談で交わしていたのである(この密約はスクープした新聞記者の“女性問題”に矮小化されて国家による権力犯罪が問われることはなく、後に佐藤栄作はノーベル平和賞を受賞することになる)。

なぜ彼ら(日本政府)は、沖縄を本土の“捨て石”にする核

牧畜民にとっての「ゆたか」という言葉(2/26)

ゲスト：楠 和樹さん(京都大学大学院)

原田 敦子(はらだ あつこ)

楠さん、アフリカに半年も行かれる方なので、いかつい山男みたいな方かと想像していましたが、会ってみたらほっそりスマートな青年で意外でした。

興味深い話をたくさんしてくださいました。

中でも印象に残ったのは、千晶さんと同じくやはりラクダのお仕置き。これは、育児放棄をする母ラクダの肛門を縛る(!)というもの。(この写真がカラーでなかったのが幸いでした…。)とてもショッキングでしたが、無々々さんが整体の世界でも女性は肛門を引き締めなさい、と教えられているとおっしゃったのでそれで納得させました。自然療法や食事療法のように、理屈はわからないけど理に叶っていることが受け継がれていることであるから、それと同じかな…。と。きっとラクダも肛門を締めることで生殖機能が上がって母性が生まれると先人は知っていたのではないのでしょうか。そう思いたい。でなければただの虐待にしか見えませんもの……。

あと、ソマリは争う男と収める女のバランスがいいのかなど思ったりしました。系譜にこだわって「お前はどこのもんじゃ!」とやってる男に対して女は「そんなのどーでもいじゃない。あ〜くだらないわねえ〜。」と言ってそう。大事な系譜には男の名前は残るけど女は残らないとか。それも「別に〜残してほしくないしい〜。そんなことより子育てとラクダの世話が大変なのよ!」とあしらうそう。あくまでも想像ですが。

ラクダをひとつの通貨として捉えたやり取りも興味深いものがありました。貨幣よりラクダを使う方がモノゴト(売買や賠償)を丁寧に気持ちを込めて扱っているように感じました。

映画「幸せの経済学」のように、だんだんと文明が入ってきてラクダを使うことも減り対価の捉え方も変わっていつてしまうかもしれませんが、できれば残ってほしいですね。

あと10年経ったらどうなっているか、その時のソマリと楠さんをまた知りたいと思いました。

みなさんの持ち寄り一品おかずやお菓子、とてもおいしかったです。千晶さんの豆のスープがまたいただけ嬉しかったです。本田さんのお味噌も、おいしくいただきました。ついごはんを食べ過ぎてしまいそう。ごちそうさまでした。

勝田 理恵(かつた りえ)

ソマリ族について、とても興味深いお話を伺いました。

最後の皆さんの感想も、感想にとどまらず問題定義をしていたいたようで、私も帰ってから考えさせられ、主人に「ゆたかさって何なんやろー」と問い、いろいろ話しました。

私も肛門を締める話はかなりビックリしました。その話の流れで、たくさんの驚きがありました。らくだのペニスは後ろ向きに付いていて、オシッコが足にひっかかり冷えるようになっているが、その為、性交がしにくく人間が介在し、相互依存の関係がかなりあるそうです。

出産、授乳など全てにおいて人間が援助しているようで、人間



社会の管理と似ているようでした。

また、ソマリの人は、初対面の人に「お前は何者や」と聞くのだそうです。

皆、20代くらい前までさかのぼった系譜が頭の中に入っていて(年配者から日々、聞かされている)、大体どこかで繋がることが多いので、「あそこの〜さんの孫かあ」となり友好的になれるそうです。今の日本で「お前は何者や」というのは職業や出身地などをさすので、だいぶ違うねと話しました。もし繋がらなくても、捏造して関係を系譜に組み込んで、辻褃を合わせることもあるようです。

紙面だと捏造は難しいけど、頭の中にあるものだから、簡単に作り変えていけるというのが面白いなあと思いました。相当、口伝えの文化が発達してるようでした。

系譜について話す語り口も聞いてみたいです。楠さんもかなり演劇のような話し方をされていたようです。

また名字はなくて代々の男の人の名前を連ねて呼ぶそうです。太郎くんだったら、「太郎くんのおじいちゃんの名前、お父さんの名前、太郎」と呼ばれ、系譜がとても大事みたいです。名字がないので、日本の家名を残す感じとも違い、系譜が大事みたいです。

面白いのは、人間の系譜には男の名前しか残らないのに、らくだの系譜にはメスの名前が残っていくみたいで、らくだのお母さんはとても大事みたいです。妊娠期間も人間と同じくらい長く、一回に一匹しか産まないの、出産も一大イベントなのでしょう。

また、らくだは北米原産でユーラシア大陸が地続きだった時に移動したようですが、最初はウサギくらいの大きさだったというのも面白かったです。

楠さんが、最初はソマリの村で受け入れられなかったけど、ロバを借りたのをキッカケに、あるおじさんの息子になり、系譜に組み込まれることで受け入れられるようになったそうです。「息子の学校の費用が、」とか、たかられたそうです。懐かしそうに話されている様子から、相当揉まれた様子が窺えました。

親戚中で、たかり合い合戦だったみたいです。そのことは、商売の貸し借りのセンスに通じ、商売はギブアンドテイクではやっていけないというお話になり、もっと聞いてみたいと思いました。

何も無い平原に、らくだが群れている光景をみて「ゆたかだね」と表現するソマリの人。らくだを介した人間関係や相互依存のことを伺うと、日本人が田畑や土地を持つ豊さともかなり違う感じがしました。

その日暮らしの綱渡りのようですが、気持ちはとてもゆたかなように感じました。「貯金なくても不安じゃないのですかね?」と伺いましたら楠さんは、「貯金で何なんですかね?」と、とても意味深い発言をされ、そのことも考えさせられました。

沢山のテーマにつながる1日でした。ありがとうございました。



報告

ささやま里ぐらしステイ (3/25)

高島 千晶 (たかしま ちあき)

3/25は、兵庫県篠山市にあるNPO風和が企画した〈ささやま里ぐらしステイ〉(3/25-27日に、福島県の親子を保養のために招待した催し)の初日で、福島から篠山に、42人の方々が到着しました。風和でこの冬、豆料理クラブ会員の木田雅之さんが料理教室をしたこともあって、初日の料理は、木田さんに任せられました。わたしもお手伝いに入り、胡麻からも会員の水谷千里さん(パン工房みのり)が参加して、一緒に料理しました。



篠山は時々雪が降る寒さでした。会場のお寺に着くと、次々に篠山のボランティアの方が来て、遠くは姫路からも福島を応援したいということで青年がボランティアに来ていました。

豆料理クラブ会員でもある風和の大月傑・千尋さんご夫婦の細やかなコーディネートは、すばらしかったです。

食材は地元の農家さんたちが寄付！それをその場で木田さんが料理していく。おおよそのメニューや準備はしていましたが、最終的なメニューは、集まった食材でその場で決めて50人分の料理を用意し、それが予定の6時にできたのです。

前菜が5品。(ライスコロケ、白菜とベーコンの蒸し煮、金時豆のフルーティーなサラダ、手亡とクリームチーズのピューレ、大根のマリネ。にんじんとじゃがいもが入ったオムレツ。あれ、6品だ。)

それから、かぼちゃのスープ(寄付されたそうめんかぼちゃも入ってる。)



パスタが2種。(名前は忘れたけど、赤いトマトベースのソース、それから、ブロッコリーが入ったペペロンチーノ。)

メインの肉料理。(寄付された細切れの豚肉をサララップの上に何枚か広げ、その上に、ほうれん草とドライマ

ト、粉チーズ、塩胡椒をふり、お肉で巻いて、小麦粉をつけて焼く。)

この料理は、作ってる皆さん、口々に「わたしも家でしてみる」とか「ヘルパーで行くおうちで作る」と、言っていました。わたしも思いました。安上がりなのに、ご馳走。他にも一緒に料理させてもらって、へーえ！と思うことがたくさんありました。

50人分のライスコロケを揚げ、50人分のお肉を焼き、パスタを茹で、2種類のパスタソースを作り、そこにパスタをからめ、作っておいたスープをあっため、それがさっきも書きましたが、6時きっかりにできあがったんです。コンロは3つしかなかったので、最後

の仕上げのところは、ほとんど木田さん一人でしてました。

福島からいらした皆さんは、とっても喜んでおられました。「こんなご馳走が待ってるとは思わなかった！」って声も。見えて、わたしは泣きそうになりました。

いろんな福島の方がおられました。京都に避難しておられるご家族、山形に避難しておられるご家族、もちろん福島にとどまられているご家族。篠山への移住を真剣に考えておられる方もありました。

夜には、篠山の市議員や、副市長さんまでいらして、「篠山は歴史ある住みやすい町、京都大阪にも近く便利」「もし篠山に越してきたい人があったら、全面的に応援する」と話され、それを聞いていて、わたしはまた泣きそうになりました。大月さん、よくがんばったなあ。この場がどれだけ福島の人を励ますことでしょう。

豆ランチパーティー@大阪・富田林市

寺内町 (4/8)

松野 恵里 (まつの えり)

豆料理クラブ会員で、起業塾・基礎講座の1期生である松野恵里さんが〈広場を作る〉というテーマで豆ランチパーティーを企画してくださいました。以下、松野さんの案内文です(千晶)

富田林寺内町は、室町時代から寺を中心に栄えた街。今も江戸～昭和の古い建物が多く残り、大阪で唯一重要伝統的建造物保存地区に指定されています。葛城山と金剛山の麓、近くに石川が流れるという地の利を生かし、かつては物流・加工の拠点として地産池消を実現していました。時代の流れで、人口の流出、住民の高齢化、空き家の増加が問題となってきていましたが、住民や自治体ほか有志により、落ち着いた中に賑わいを取り戻そうと様々な試みがされています。小さなお店も少しずつ増えてきています。女性が一人で頑張っているお店も多いです。小さな広場が沢山産まれようとしているこの街で、広場を作り続けておられる千晶さんに「広場」について語っていただきます。

豆ランチパーティー、無事終了いたしました。千晶さん、むーさん、遠いところ来ていただいて本当にありがとうございました。小さな広場が生まれつつある寺内町で、広場を作るというテーマの会を開催できたこと、誇りに思います。シェアハウスめぐりにたどり着いた時の千晶さんの高揚した笑顔、とても可愛かった(失礼(笑))です。

開催までには、減ったり増えたり、増えたり減ったりと、一時はどうなることかと思っておりましたが、想像以上にいい場になって、興奮！しばらく余韻にひたっていました。(まだ興奮冷めやらず)

遅刻者続出が幸い(笑)して、思いがけず参加者さん同士、先に盛り上がっていたのがとてもよかったと思います。その流れを生かして一人一人の方の背景をもっと聞ければよかった。もし可能であれば、または是非集まっていたら、じっくり聞かせていただきたいです。呼びかけてみよう！

アイルランド
愛蘭土より (10)

アイルランドの大統領

ハミルトン 純子 (はみるとん じゅんこ)

まだ2月の終わりだというのに、こちらでは一気に桜が咲き始め、太陽の明るさまで変わったような気がして、すっかり春の陽気です。

少し連載のお休みをいただいていたのですが、今回はアイルランドの大統領について書きたいと思います。

昨年10月に選挙が行なわれ、マイケル・D・ヒギンス氏が当選し、11月11日に第9代大統領が誕生しました。彼は労働党の政治家で元閣僚ですが、詩人でもあり、芸術に造詣が深いという点で、とてもアイルランドらしい大統領かもしれません。

アイルランドの大統領は国家元首ではありますが、儀式的な職務が主で政治的な権限は持ちません。そのために、大統領は「国の顔」としてふさわしいかどうかという視点で選ばれることが多いようです。

前代はメアリー・マッカーリス氏、その前もメアリー・ロビンソン氏と女性大統領が続き、また彼女達がとてもすぐれた大統領だったので、その後任にふさわしく絶対的な支持を集める候補者がないうまま、7名の候補者乱立となりました。候補者たちの前歴が多彩で、『「元人気歌手」「ゲイの教授」「テレビで人気の実業家」から「元殺し屋？」まで』と書き立てられるほどの面々でした。選挙期間中、候補者の人気は大きく動き、ネガティブキャンペーンなどもあって、最後まで予想がつかない大混戦となっていました。後半で最も人気が高かった実業家候補者のお金に関するスキャンダルが出たのと、元IRAの戦士だったという候補者たちを当選させたくない人たちがこぞってヒギンス氏に投票したおかげで、彼の逆転勝利という結果に終わりました。

ただ、アイルランドの選挙にしては珍しく、投票率が56%ととても低く、国民の関心は低かったようです。

先日、私が理事を務めるIreland Japan Association(愛日協会)の年次夕食会が開かれたのですが、大統領をお招きしたところ、快くご出席くださいました。

警備やタイムテーブルの件では、大変気をつかいましたが、滞りなく終了することができました。

ヒギンス大統領は大変小柄な方で、風貌はアイルランドの妖精を思わせます。またとてもハイトーンな声で話されるのですが、それもなんとなく妖精っぽいです。

スピーチの中では、アイルランドと日本の関係についてたくさんの事例を挙げて話されました。古くはアイルランドの血をひくラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が日本の民話を英語翻訳して世界に紹介したこと、昨年は東京映画祭にアイルランドの映画監督ニール・ジョーダン氏が招聘されたこと、またアイルランドと日本の外交関係樹立以来55年を迎えることなどですが、両国の関係は深いのだと再認識しました。スピーチの最初と最後は美しいアイルランド語で話されましたが、この部分はまったく理解できないのが残念でした。大統領ご夫妻の穏やかなお人柄もあって、カジュアルな雰囲気でも和やかな会食となりました。

大統領夫人のお隣の席だった方から、彼女が熱心なマクロビオティシャンであり、神道からアニメまで、最初から最後まで日本について質問攻めにあったとお聞きしました。日本に高い関心を持ってくださっていることがわかり、うれしく思いました。

アイルランドの外交は、3月17日のアイルランドの最も大切な

祝日、「St.Patrick's Day(聖パトリックの日)」に合わせて活発に行なわれます。前大統領のマッカーリス氏が日本を訪問されたのは2005年だったと思いますが、近い将来、ヒギンス大統領の日本訪問も実現するかもしれません。もしそんなことがあれば、ちょっと注目していただけたらうれしいです。

さて、今回は聖パトリックの日も近いので、最もアイルランドらしい料理のひとつ、ギネスシチューを紹介しします。暖かいシチューというよりもお肉の煮込みという感じでお試ください。お肉は安い煮込み用で十分柔らかくなります。ギネスビールのほんのりした苦みが生きたお料理です。



【レンズ豆とソーセージのスープ】

【材料】

煮込み用牛肉 500g、玉ねぎ 中1個、人参 中2本、セロリ 2本、にんにく 3片、小麦粉 大さじ1+1/2、トマトピューレ 大さじ1、チキンストック 300cc、ギネスビール 350cc、ブーケガルニ(月桂樹/ローズマリー/パセリの茎・・・各2、オレンジの皮 1/4個分を糸で縛る)、干し杏 or 干しいちじく 2個、塩・こしょう 適量、オリーブオイル 適量

【作り方】

- 0) 牛肉は大きめに切り分ける。玉ねぎは荒みじん、人参・セロリは長さ2cmくらいに切る。にんにくは皮をむいておく。
- 1) 底の厚い鍋にオリーブオイルをひき、軽く塩・こしょうをした牛肉を入れて全体に焼き目をつけ、取り出す。
- 2) ①の鍋に玉ねぎ、人参、セロリ、にんにくを入れ、少し茶色く色づくまでいためる。分量の小麦粉をふり入れて全体になじませたら、トマトピューレを加えて①の肉を戻し、チキンストックとギネスビールをゆっくり注ぐ。
- 3) 全体をよく混ぜたらブーケガルニと干し杏を加えて一度ふっとうさせ、アルミホイルをはさんでふたをする。150°Cに温めたオーブンに約1時間半入れるか、弱火でコトコト煮る。途中で水分がなくなったら水を足す。
- 4) オーブンから出したらブーケガルニを取り出し、塩・こしょうで味をととのえる。たっぷりのゆでたじゃがいもを添えてどうぞ。

以前、私のブログでも紹介していますので、よかったらそちらもご覧ください。

筆者ブログ〈愛蘭土の林檎の木の下で〉<http://granna.exblog.jp/>